

真の神で全てのものの創造者エホバとの個人的な絆がなければ、真の幸福を経験できないのはなぜですか？

とても深い質問ですね。真の幸福とは何かを考える時、全てのものの創造者エホバとの個人的な絆がなぜ不可欠なのかを理解することは、人生の目的そのものを理解することにつながると思います。

聖書の観点から、幾つかの点を考えてみましょう。

1. 人間は、創造者との関係を持つように造られたから

人間は、食べること、眠ること、楽しむことだけで満足できる存在ではありません。愛すること、愛されること、人生の意味を知ること、正しいことを行うことなど、もっと深い欲求を持っています。

例えば、伝道の書 3 章 11 節には、神が人間の心に「永遠を思う心」を与えたとあります。

人間は、自分の人生だけでなく、命の起源や将来、なぜ生きているのかということまで考えます。これは、物質的な豊かさだけでは満たされない、人間の深い必要を示しているのかもしれない。

創造者との絆を持つことは、自分がどこから来て、何のために生き、どこに向かっているのかを理解する助けになります。



2. エホバとの絆によって、愛の源と結ばれるから

愛は幸福にとって欠かせないものです。しかし、人間の愛は不完全で、時には失望や裏切りを経験することもあります。

一方、ヨハネ第一 4 章 8 節は「神は愛」だからです、と述べています。

エホバの愛について学び、その愛を実感するようになると、人から認められるかどうかだけに左右されない、深い安心感を育てることができます。

さらに、エホバとの絆は、自分が愛されることだけでなく、他の人を愛する力も育てます。

例えば、相手が親切にしてくれるから親切にするのではなく、相手が自分を無視したり、誤解したりしても、思いやりを示そうと努力できます。

これは、以前お話ししたアガペー愛を培うこととも深く関係しています。神の愛を知るほど、自分もその愛を人に示したいという気持ちが育つのです。

3. 人生の苦しみにも意味と希望を見いだせるから

人生には、努力しても解決できない問題や、なぜこんなことが起きるのか理解できない出来事があります。

エホバとの絆があれば、苦しみがなくなるわけではありません。しかし、苦しみの中でも、次のような確信を持つことができます。

- 自分は独りぼっちではない。
- 神に助けを求め、知恵や力をいただける。
- 不公正や苦しみが永遠に続くわけではない。
- 今の苦難だけで人生の価値が決まるわけではない。

詩編 46 編 1 節は、神を「私たちの避難所、力」と表現しています。

また、ローマ 15 章 4 節は、聖書によって希望を持てることを教えています。

真の幸福とは、いつも楽しい気持ちでいることではなく、悲しみの中でも希望を失わずに生きられることでもあるのです。

4. 自分より大きな目的のために生きられるから

人間は、自分の利益や楽しみだけを追い求めても、必ずしも深い満足を得られるとは限りません。

しかし、エホバとの絆が深まると、人生の中心が少しずつ変化します。

自分のためだけに生きる

自分が得られるものや、人からの評価が幸福の中心になりやすい。

神への愛と人への愛を中心に生きる

感謝、親切、奉仕、希望を大切にし、他の人の幸福にも喜びを感じられる。

イエスは、使徒 20 章 35 節で「受けるより与える方が幸福である」と教えました。

エホバを愛し、そのご意志に沿って生きようとする人は、聖書を学ぶことや人を助けること、良い知らせを伝えることなどを、単なる義務ではなく、愛を表す機会として捉えられるようになります。

もちろん、奉仕をしていても疲れたり、落胆したりすることはあります。それでも、誰かのために行動することが、人生に深い意味と喜びをもたらすのです。

5. エホバとの絆は、将来への確かな希望につながるから

人間の幸福を脅かす大きな問題の一つは、病気、老化、死、そして愛する人との別れです。

どれほど成功しても、こうした問題を人間の力だけですべて解決することはできません。

しかし、聖書は、神が人類のために素晴らしい将来を約束していると教えています。啓示 21 章 3、4 節には、死や悲しみや苦痛がなくなるという希望が記されています。

この希望をエホバとの個人的な絆の中で理解するなら、単に「いつか良い世界になる」と知るだけでなく、その約束をしてくださった方を信頼して、今を生きることができるのです。

では、最も大切な点は何でしょうか？

私は、次のように整理できると思います。

- 人生の意味を知ることができる。
- 愛されているという安心感を育てられる。
- 苦難の中でも希望を持てる。
- 他の人を愛し、助ける喜びを味わえる。
- 将来への確かな希望を持てる。

ただし、一つ大切な点があります。エホバとの絆を持つ人も、悲しみや不安を経験しますし、信仰を持たない人も、人間関係や親切な行いから本物の喜びを経験することがあります。聖書の観点から言えば、エホバとの絆は、そうした喜びを否定するものではなく、人生全体を理解し、希望と愛の中で生きるための土台なのです。

最後に、エレミヤ 9 章 23、24 節の考え方も重要です。人間は知恵や力や富を誇るのではなく、エホバを知り、エホバがどんな方であることを理解することを誇るべきだと教えられています。

エホバとの絆の本当の価値は、神から幸福を与えていただくことだけではありません。エホバがどんな方かを知り、その方を愛し、その方と共に歩むこと自体が、幸福の中心になるのです。

ここで、もう一つ考えてみたい質問があります。

人は、エホバとの絆を持たなくても、一時的な幸福や満足を感じることができます。それでも、なぜそれだけでは真の幸福とは言えないのでしょうか？

この違いを掘り下げると、「一時的な楽しさ」と「人生全体を支える幸福」の違いが、もっとはっきり見えてくると思います。

ではこのエホバとの強い絆を持てた人は、苦しみや試練などの状況にあまり影響されない、強く安定した人に、どうしてなれるのでしょうか？

とても大切な質問ですね。

エホバとの強い絆を持つ人が、苦しみや試練に直面しても比較的安定していられるのは、単に信仰が強いからというだけではないと思います。その人の心を支える土台、物事の見方、幸福の基準、そして将来への希望が変化するからです。



例えるなら、強い風が吹いても深く根を張った木は簡単には倒れません。風が吹かなくなるのを待つだけでなく、風の中でも立ち続けられるのです。

では、エホバとの絆は、どのようにしてそのような強さを生み出すのでしょうか。

1. 自分を支えてくれる方への揺るぎない信頼があるから

箴言 3 章 5、6 節は、心を尽くしてエホバに頼るよう勧めています。

人生で不安になるのは、問題が起きることだけが原因ではありません。「この先どうなるのだろう」「自分に解決できるだろうか」という不確実さも、心を大きく揺さぶります。

しかし、エホバとの絆が深い人は、次のように考えられます。

- 自分には分からないことがあっても、エホバは全てをご存じである。
- 自分には解決する力が足りなくても、神に知恵や助けを求められる。
- 今は先が見えなくても、神の愛と約束を信頼できる。

ここで重要なのは、全ての問題を自分で理解し、制御しなければ安心できない、という考えから自由になれることです。

もちろん、信頼していても不安になることはあります。それでも、不安に支配され続けず、再び信頼を取り戻すことができます。

2. 自分の価値を、周囲の評価だけで決めなくなるから

人は、他の人から批判されたり、無視されたり、期待に応えられなかったりすると、自分の価値まで失ったように感じる場合があります。

しかし、エホバとの絆が深まると、自分の価値を測る基準が変わっていきます。

人からの評価を中心にと

人に褒められれば安心し、批判されれば自信を失いやすい。

エホバとの絆を中心にと

人からどう見られるかだけでなく、神の目から見て誠実に歩んでいるかを大切にできる。

ガラテア 1 章 10 節は、人間を喜ばせることと神を喜ばせることの違いを考えさせます。

例えば、聖書の良い知らせを伝えても、無視されたり、誤解されたりすることがあります。そのような時も、相手の反応だけで自分の努力や価値を判断する必要はありません。

自分にできることを愛を込めて行ったなら、相手がどう反応するかは自分の完全な支配下にはないからです。

これは、他人の評価を気にしなくなるという意味ではありません。他人の評価に、自分の心の主導権を明け渡さなくなるということです。

3. 苦しみを、自分の人生全体と切り離して考えられるから

試練の最中には、目の前の問題が人生の全てであるかのように感じられることがあります。

例えば、仕事での失敗、人間関係の悪化、健康上の問題などによって、「自分の人生はもう駄目だ」と考えてしまうかもしれません。

しかし、エホバへの信頼と聖書の希望を持つ人は、目の前の痛みだけで人生全体を判断しないようにできます。

ローマ 8 章 18 節では、現在の苦しみと、将来明らかにされる栄光とが比較されています。

この考え方には、大きな力があります。

- 今の失敗は、自分の人生の全てではない。
- 今の苦しみは、自分の将来の全てを決めるものではない。
- 今は理解できない経験も、神への信頼を保ちながら乗り越えていける。

つまり、苦しみを否定するのではなく、苦しみを人生全体の中の一部として捉え直せるのです。

4. 苦しみの中でも、感謝と喜びを失わずにいられるから

これは、以前お話しした「感謝と幸福の好循環」とも深く関係しています。

苦しい時には、失ったものや、できなくなったことばかりに注意が向きがちです。しかし、エホバとの絆が深い人は、苦しみの中でも、残されている良いものに目を向けることができます。

例えば、

- 今日命が与えられていること。
- 自分を気遣ってくれる人がいること。
- 祈りによって心の内を神に打ち明けられること。
- 聖書から慰めや知恵を得られること。
- 将来への希望を持てること。

こうしたことを意識するなら、苦しみが人生全体を覆い尽くすのを防げます。

フィリピ 4 章 6、7 節は、祈りによって神の平和を得られることを教えています。

注目したいのは、問題が全て解決してから平和が得られるとは限らない、という点です。問題が続いている間にも、祈りや信頼によって心を落ち着かせられることがあります。

もちろん、悲しみや疲労が強い時には、感謝することさえ難しい場合があります。そのような時に無理に明るく振る舞う必要はありません。悲しみを率直に祈りに含めることも、神との絆の一部です。

5. 試練を通して、さらに強くなれるから

ヤコブ 1 章 2-4 節は、信仰が試されることによって忍耐が育つと説明しています。

ここには興味深い仕組みがあります。

試練に直面する

不安、悲しみ、迷いが生じる

祈り、聖書の言葉を考え、神に頼る

自分の限界を認め、神の助けを求める

忍耐と信頼が育つ

困難を乗り越えた経験が、次の試練への備えになる

もちろん、全ての試練が自動的に人を強くするわけではありません。深く傷つくこともあります。しかし、助けを求め、必要な支援を受けながら神への信頼を保つなら、試練を通して忍耐や思いやり、謙遜さを培えることができます。

以前お話ししたアガペー愛についても同じです。苦しみを経験した人は、他の人の苦しみに以前より深く共感できるようになることがあります。自分が慰められた経験が、今度は他の人を慰める力になるのです。

6. 最も大切なのは、エホバとの絆が「心の避難所」になること

ここまでの点を一つにまとめると、次のようになります。

試練がもたらすもの	エホバとの絆が育てるもの
不確実さ	神への信頼
人からの批判	神の目から見た自分の価値
目の前の苦しみ	将来への希望
失ったものへの悲しみ	感謝できるものへの気付き
自分の弱さ	助けを求める謙遜さ
他の人の苦しみ	同情心とアガペー愛

ここで、詩編 23 編 4 節の言葉を思い起こせます。ダビデは、暗い谷を歩く時でさえ、神が共にいてくださることを確信していました。

ダビデは、谷が存在しないとは言っていません。危険や恐れが全くなくなるとも言っていません。それでも、共にいてくださる方への信頼があったのです。

真に強い人とは、決して傷つかない人でも、決して不安にならない人でもありません。傷ついた時に助けを求め、倒れそうな時に支えを得て、希望を取り戻しながら歩み続けられる人です。

そして、エホバとの絆が深まるほど、その強さは自分の能力だけに依存するものではなくっていきます。

最後に、もう一つ考えたい点があります。

エホバとの絆が強い人は、単に試練に耐えられるだけでなく、なぜ試練の中でも他の人に親切にし、感謝し、喜びを示すことさえできるのでしょうか。

それは、心の安定が、単なる忍耐力を超えて、アガペー愛という人格の深い変化につながっていくからではないでしょうか。

素晴らしい情報をありがとうございます。ではエホバへの絆をこれからも強めていくのに、何が大切ですか？

こちらこそ、深いテーマと一緒に考えることができうれしいです。

エホバとの絆を強めるということは、単に聖書の知識を増やしたり、宗教的な活動を増やしたりすることだけではないと思います。エホバがどんな方かをもっとよく知り、その愛を実感し、自分もエホバを愛して、毎日の生活の中でエホバと共に歩むことではないでしょうか。

では、どうすればその絆を継続的に深めていけるでしょうか。特に大切だと思う 6 つの点を考えてみましょう。

1. 聖書を読む時、「エホバはどんな方か」を知ろうとする

聖書を読む時、出来事や教訓を理解するだけでなく、その記述からエホバの性格や感情、物事の見方を知ろうとすることが大切です。



例えば、エホバの憐れみ、忍耐、公正さ、忠実さ、喜びなどに注目できます。

出エジプト記 34 章 6、7 節には、エホバが憐れみ深く、思いやりがあり、怒るのに遅く、揺るぎない愛に満ちた方であることが示されています。

聖書を読んだ後、こんな質問をしてみてください。

- この記述から、エホバのどんな特質が分かるだろう？

- この方は人間をどのように扱っておられるだろう？
- この記述を通して、エホバをもっと愛するようになるのはなぜだろう？

知識を得るだけでなく、知識を通してエホバご自身を知ることが、絆を深める鍵になります。

2. 祈りを、毎日の自然な会話のようにする

以前、祈りを食事の前だけでなく、日常生活の中でもっと大切にしたいという考えを話しましたね。これは、エホバとの絆を強めるうえで、とても重要な方向性だと思います。

祈りを特別な時間だけのものにせず、日常生活の中でエホバに心を向ける習慣を育てることができます。

例えば、

- 朝、今日一日をどう過ごすかについて助けを求める。
- 難しい判断をする前に、聖書の原則に沿って考えられるよう祈る。
- うれしいことがあったら、感謝を伝える。
- 失敗したら、正直に気持ちを打ち明け、立ち直す助けを求める。
- 夜、一日を振り返り、感謝できたことや改善したいことを話す。

詩編 62 編 8 節は、神の前に心を注ぎ出すよう勧めています。

祈りでは、立派な言葉を並べることも、正直な心でエホバに近づくことが大切です。喜びだけでなく、疑問、悲しみ、失望、弱さも率直に話せます。

3. エホバの愛を黙想し、感謝する

絆は、相手について多くのことを知るだけでは深まりません。その相手が自分に示してくれた愛を実感することによっても深まります。

例えば、次のようなことを考えられます。

- 命や自然の美しさを与えてくださっていること。
- 不完全な人間にも忍耐を示してくださること。
- 聖書を通して生き方を教えてくださること。
- 失敗しても、悔い改めて立ち直す機会を与えてくださること。
- 将来への希望を与えてくださっていること。

詩編 103 編 2-4 節は、エホバがしてくださったことを忘れないよう勧めています。

ここで大切なのは、感謝を義務にしないことです。エホバがしてくださったことを一つずつ思い巡らすと、自然に感謝が深まることがあります。

そして感謝が深まると、エホバを喜ばせたい、エホバの愛に応えたいという気持ちも育ちます。

4. 学んだことを実践し、エホバの考え方を自分のものにする

イエスはヨハネ 14 章 21 節で、ご自分の命令を受け入れて守ることと、愛との関係を示しました。

例えば、聖書から「すぐに怒らないこと」の大切さを学んだとします。

その知識を持っているだけでなく、家族に腹が立った時に、すぐに反応せず、相手の気持ちを考えてみる。必要なら穏やかに話し、間違っていたら謝る。

そのような行動を重ねると、聖書の教えが単なる知識ではなく、自分の人格の一部になっていきます。

ここには大切な循環があります。

エホバについて学ぶ

エホバの考え方を理解し、愛する

学んだことを生活で実践する

エホバへの信頼と愛が深まる

もちろん、一度の失敗で絆がなくなるわけではありません。失敗した時に正直に認め、助けを求め、再び努力することも、エホバとの関係を深める過程の一部です。

5. 人へのアガペー愛を実践する

これは、これまで話し合ってきたテーマとも深くつながっています。

エホバとの絆が深まると、エホバが愛しておられる人々を自分も大切にしたいと思うようになります。

例えば、

- 自分を理解してくれない人にも、敬意を示す。
- 困っている人の話を、すぐに判断せずに聞く。
- 関係が悪くなった人との和解に向けて努力する。
- 聖書の希望を、相手に押し付けるのではなく、相手の気持ちを尊重しながら伝える。
- 誰にも気付かれない親切を、喜んで行う。

ヨハネ第一 4 章 20、21 節は、神への愛と兄弟への愛が切り離せないことを教えています。

特に伝道活動も、相手の反応や成果だけを基準にするのではなく、その人の幸福を願う愛の表れとして取り組むことができます。

エホバを愛することと、人を愛することは、別々の目標ではありません。

人を愛する行動は、エホバへの愛を表す機会にもなるのです。

6. 完璧を求めず、毎日少しずつ絆を育てる

最後に、ぜひ大切にしたい点があります。

エホバとの絆は、短期間で完成させるものではありません。人間関係と同じように、時間をかけて育てていくものです。

毎日、長時間の聖書研究や祈りができない日もあるでしょう。疲れたり、気持ちが沈んだり、集中できなかったりする日もあります。

そのような時に、自分を責めすぎないことも大切です。

短い聖書の言葉を一つ黙想する。心から一言祈る。誰かに親切を示す。寝る前に感謝できることを一つ思い出す。

こうした小さな行動も、継続すれば意味のあるものになります。

今日から始められる「絆を深める 5 分間」

毎日全部できなくても大丈夫です。できた項目にチェックを入れてみてください。

- ☐ 聖書を読む: 短い節でもよいので、エホバの特質を一つ見つける。
- ☐ 一つ黙想する: その特質が自分の生活とどう関係するか考える。
- ☐ 祈る: 感謝、心配事、助けてほしいことを率直に話す。
- ☐ 一つ実践する: 親切、忍耐、許しなど、具体的な行動を一つ選ぶ。
- ☐ 一日を振り返る: エホバに感謝できることを一つ思い出す。

最後に、一つの大切な考え

エホバとの絆を強めるための努力は、単に「もっと多くのことをしなければ」という義務感から生まれる必要はありません。

むしろ、エホバがどんな方かを知れば知るほど、その知恵を信頼したい、その愛に応えたい、その考え方を身に着けたいという気持ちが育っていくのではないのでしょうか。

そして、そうした愛が深まるにつれて、苦しい時にも信頼し、うれしい時には感謝し、人に対してはアガペー愛を示すことが、少しずつ自然になっていくと思います。

目標は、単にエホバについてよく知っている人になることではなく、エホバを深く知り、愛し、その方との絆によって人格そのものが良い方向に変化していく人になることです。

祈りという定常的な習慣がなかなか確立できません。どうしたら良いですか？

祈りを生活の中に定着させたいと思っておられるのですね。そのお気持ちは、エホバとの絆を深めるうえで、とても大切な出発点だと思います。

そして、祈りの習慣がなかなか確立できないことを、あまり自分の弱さとして責めないでいただきたいです。祈りを大切にしたいと思うことと、それを毎日の習慣にすることの間には、誰にとっても小さくない隔たりがあります。その隔たりを埋めるには、強い決意だけでなく、無理なく続けられる仕組みが役立ちます。

以前お話しした、食事の前には祈ることが多いという点も、良い出発点になります。それを足掛かりにして、少しずつ祈りを生活全体に広げてみてはどうでしょうか。

1. 祈りを「特別な時間」から「いつでも話せる関係」に変える

まず、祈りについての考え方を少し変えてみましょう。

祈りというと、静かな場所で時間を確保し、きちんとした言葉を使って長く祈らなければならない、と感じることがあるかもしれません。

しかし、聖書はテサロニケ第一 5 章 17 節で「絶えず祈ってください」と勧めています。

これは、四六時中、言葉を発して祈り続けるという意味ではありません。日常生活の中で、いつでもエホバに心を向け、助けを求め、感謝を伝える姿勢を保つことが大切なのです。

例えば、こんな短い祈りでもよいのです。

- 朝、目が覚めた時：「今日もあなたを喜ばせる生き方ができるよう助けてください」
- 仕事を始める時：「落ち着いて、正しく判断できるよう助けてください」
- 誰かに腹が立った時：「感情に流されず、愛を示せるよう助けてください」
- うれしいことがあった時：「この喜びをありがとうございます」
- 不安になった時：「心配でいっぱいです。どうか落ち着いて考えられるよう助けてください」

このような短い祈りを積み重ねることで、祈りは特別な儀式ではなく、エホバとの日常的な絆の表現になっていきます。

2. 新しい習慣を、すでにある習慣に結び付ける

習慣を定着させるうえで、これは特に効果的な方法です。

「時間ができたら祈ろう」と考えると、忙しい日には忘れてしまいます。そこで、すでに毎日行っていることを、祈りの合図にしてみましょう。

朝、起きたら

まず 30 秒ほど、今日一日の助けを求める。

聖書を読んだら

読んだ内容について、感じたことや学んだことをエホバに話す。

食事の時

今ある習慣を大切に、食物だけでなく、その日に感謝できることも考える。

寝る前に

一日を振り返り、感謝したいこと、反省したいこと、助けてほしいことを話す。

最初から全部始める必要はありません。まずは朝と夜の 2 回だけでも十分です。習慣が定着してから、日中の短い祈りを増やしていきましょう。

3. 祈りの内容に困らないようにする

祈ろうと思っても、「何を祈ればよいのだろう」と考えているうちに、祈る機会を逃すことがあります。

そのため、祈りの内容を次の 4 つに分けて考えてみるとよいでしょう。

- ① 感謝: 命、家族、食物、聖書の言葉、誰かの親切など、今日の具体的な感謝を一つ伝える。
- ② 導き: 何を優先すべきか、どう話すべきか、聖書の原則をどう当てはめるべきか、知恵を求める。
- ③ 愛する力: 家族や仲間、困っている人、苦手な人にも、アガペー愛を示せるよう助けを求める。
- ④ 信頼: 不安、失望、誘惑、困難などを率直に打ち明け、エホバに頼る気持ちを強めてもらう。

もちろん、毎回 4 つ全部を祈る必要はありません。その時に心にあることを一つ話すだけでもよいのです。

また、マタイ 6 章 7、8 節でイエスは、祈りで多くの言葉を並べること自体が大切なのではないと教えました。言葉の長さより、心からエホバに話すことを大切にできます。

4. 祈りを忘れた日にも、自分を責めずに再開する

ここは、習慣を長く続けるためにとても重要です。

祈ることを忘れた時に、「またできなかった。自分はだめだ」と考えると、祈りそのものが重荷になってしまいます。

そこで、次のように考えてみてください。

- 祈り忘れたことに気付いたら、その時に短く祈る。

- 一日できなくても、翌日から再開する。
- 祈る回数だけでなく、エホバへの信頼や感謝が育っているかにも目を向ける。

祈りの習慣を作る目的は、チェックリストを完璧に埋めることではありません。エホバとの関係を深めることです。

習慣が途切れないことより、途切れた時に自然に戻れることのほうが、長い目でみると大切です。

まずは 7 日間、これだけ試してみませんか？

最初の 1 週間は、次の 2 つだけを目指にすることをお勧めします。

毎日の祈り・最初の一步

今日できたらチェックしてください。長い祈りにする必要はありません。

朝: 30 秒の祈り

今日一日、エホバに喜ばれる考え方や行動ができるよう助けを求める。

夜: 1 分の祈り

今日感謝できたことを一つ伝え、心に残ったことや助けてほしいことを話す。

目標は長く祈ることではなく、毎日エホバに心を向ける機会を作ることです。

朝と夜の祈りが自然にできるようになったら、日中にも短い祈りを加えていきましょう。

最後に、一つだけお尋ねしたいことがあります。祈りの習慣がなかなか定着しない原因は、人によってかなり違います。

あなたの場合、次のどれが一番近いでしょうか？

祈ろうと思っても、日常生活の中で忘れてしまう。

忙しくて、落ち着いて祈る時間を確保できない。

何を祈ればよいか分からず、祈りが続かない。

祈る必要性は分かっているが、気持ちがなかなか向かない。

形式的な祈りになりやすく、エホバに心から話している実感が薄い。

その他、またはいくつかが重なっている。

原因が分かれば、単に「もっと祈ろう」と努力するよりも、ずっと実践的な方法を考えられます。エホバとの絆を深めたいという気持ちを、無理のない毎日の習慣につなげていきましょう。(以上)